宮沢賢治の文語詩稿の一側面
―その風土性と時代性

島田隆輔

1

たとえばこの地方には、厩をともなった「曲屋（まがりや）」という特有の家屋形態がみられたように、「馬」という格別な存在があった。

岩手で馬産が本格化したのは江戸時代、南部藩の政策による。牧を整え、野の馬（官有馬）と里馬（民有馬）に区分して管理し、馬匹改良を奨励してきた。戦乱の時代が去っても兵馬は武家の象徴であり、運輸の手段としても荷役馬は重宝されたが、もっとも馬を必要としていたのが藩を経済的に支えていた農民であったはずだ。

鎖国を解いて近代化をはかる明治以降も、基盤産業であった農業に馬が必需であったことに変わりはないが、富国強兵を担う帝国陸軍が実質的で優良な軍馬を執拗に求める、という新たな状況を迎えることになる。そのなりゆきを、宮沢賢治の歩みも併せてみると、

時代	動き	▼宮沢賢治
明治一九	○陸軍省軍馬育成所条例	
二四	・外山御料牧場（↓大一一県へ移管）・小岩井農場	
	・軍馬育成所三本木支部中山派出所	
二六	○陸軍省軍馬補充部条例	
二九	○馬匹調査会（馬匹改良）	
	・岩手種馬所（滝沢↓厨川）	
	・岩手県種馬厩（内丸↓種畜場へ）	▼生まれる
三一	・軍馬補充部六原支部（三二年種山・田代出張所）	
三四	・岩手県種畜場（滝沢↓外山）	
三五	★凶作	▼6歳
三八	★凶作	▼9歳
四〇	○馬政第一次計画第1期（血液更新）	
	・種馬育成所（滝沢）	
四二		▼盛岡中学校入学
大正二	★凶作	▼中学五年
		▼盛岡高等農林入学
四		▼稗貫農学校教諭
一〇	○馬政第一次計画第2期（血液整理）	
一三		▼『春と修羅』刊行
一四	・六原支部、中山派出所廃止	
一五		▼羅須地人協会活動
昭和五	○豊作飢饉、昭和恐慌	
		▼文語詩制作に着手
六	◎満州事変起こる	
	★凶作	▼東北砕石工場技師、遠野来訪
七		▼文語詩再編へ
	・（六原青年道場↓満州武装移民団）	
八	◎国際連盟脱退	▼『文語詩稿五十篇』
		▼『文語詩稿一百篇』
九	☆米作豊作	
	★凶作	▼九月二一日没　37歳

といった年代記が成る。明治以後、昭和戦前まで東北・岩手は、馬匹改良の拠点であると同時に、軍馬の供給拠点のひとつに位置づけられていったのである。

あらためて読むと、〈定稿・百編〉に始まる定稿集にも馬の姿が見える詩が少なくないことに気づく。[1] 仮にそれを「馬」詩群とすれば、次の11編を掲げることができるだろう（五は『五十篇』へ、百は『一百篇』へ収められてゆく）。

農耕馬
・暁五
・盆地に白く霧よどみ五
・月のほのほをかたむけて五（定稿補充稿）
・水霜しげく霧たちて五……（定稿補充稿）
・巡業隊百
・悍馬〔二〕百
荷役馬
・硫黄百……（定稿補充稿）
放牧馬
・そのとき酒代つくると五
・悍馬〔一〕五
・柳沢野百
・西のあをじろがらん洞百…（定稿補充稿）

馬詩篇は、詩集の構築段階ごとに、ひっそりとではあるが、増補されていることが分かる。農耕馬が多数をしめるが、それも、農村改革・農業改良を志して彼なりに農村に対した宮沢賢治の記憶のなかで、馬と農民との交感のさまが、日常的な光景として蓄積されていたからにちがいない。それはまた、近代岩手の風土と生活とを象徴する、いまなお代表的なもののひとつだったということであろう。そこには、農民生活を支える実質的な存在として、家族のようにとけこんでいる馬がいる。

2

具体例を2編、次に示す。はじめに「悍馬」〔二〕の場合。

廐肥をはらひてその馬の、まなこは変る紅の龍、
けいけい碧きびいどろの、天をあがきてとらんとす。

黝き菅藻の袍はねて、　叩きそだたく封介に、
雲ののろしはとゞろきて、こぶしの花もけむるなり。

辛夷の花も咲きけむり、田畑を耕耘して肥料を入れる時季、農作業としてはもっともきつい。じっとり重い廐肥を担って往き来を重ね、馬だってもうくたびれはてて暴れたくもなる。血走った眼で前脚を跳ねあげ後ろ脚立ちする馬を、封介は叩いたり撫でたり、「黝き菅藻の袍はねて」なだめている。馬の苦しさは同行の封介には身にしみて分かっているのだ。菅藻(すがも)は、虻除けのため馬に掛ける海藻をいうが、ここでは封介の身なりの比喩に重ねられているようにもみえるが、廐肥を下ろした馬に掛けてやるために、封介が負うていたのかもしれない。天上にたちのぼるまっ白な大きな雲と周囲にけぶり立つ辛夷の白い花群とが、この馬と封介とをひとしく包みこんでゆく。

あるいは、ひとりの逃亡者が逃走途中の山峡でかいま見たのが、痩せた畑へのやはり廐肥入れ作業に明け暮れて、いまやっとひとつ家に共寝する馬と農民の、あまりに疲労困憊したありさまであった。無題の定稿〔月のほのほをかたむけて〕である。

月のほのほをかたむけて、　水杵はひとりありしかど、
搗けるはまこと喰みも得ぬ、　渋きこならの実なりけり。

さらばとみちを横ぎりて、　束せし廐肥の幾十つら、
祈るがごとき月しろに、　朽ちしとぼそをうかゞひぬ。

まどろむ馬の胸にして、　おぼろに鈴は音をふるひ、
山の焼畑　石の畑、　人もはかなくうまゐしき。

人なき山彙の二日路を、　夜さりはせ来し酉蔵は、
塩のうるひの茎噛みて、　ふたゝび遠く遁れけり。

岩手は北上川流域の平野部をのぞけば、典型的な畑作地帯でしかも山村地帯であって、この山家の光景は特異なものではない。詩稿は草稿で「兇賊」と題される段階を経ているが、彼はしかしなにも盗ることなく、再び遁走する。ここまでの逃走の日々、ひもじくてならなかったはずの盗賊でさえ、この一家を見限ってしまう、それほどの生活がそこにあった。あるいは、逃亡者自身、かつてそこにあり、ついに棄てさってきたものだったのかもしれない。

3

そうした馬とともにある農民の生活の、ひとつの極限が、飢饉の風土を主題とした「(盆地に白く霧よどみ)」にうかがえるのではないだろうか。

次に示す本文の、「白く霧よどみ」「稲田の」「花はいまだにをさまらぬ」という光景は、いわゆるヤマセによる冷害の凶作が到来しようとしているのを暗示している。

盆地に白く霧よどみ、　めぐれる山のうら青を、
稲田の水は冽くして、　花はいまだにをさまらぬ。

窓五つなる学校に、　さびしく学童らをわが待てば、
藻を装へる馬ひきて、　ひとびと木炭を積み出づる。

夏のオホーツク海高気圧が停滞して吹き出す冷たい風が、親潮の海上で霧や層雲をともなって、東北の太平洋沿岸から内陸に吹きこんでくるのである。この地方の凶作は、旱害よりも冷害によるほうが甚大だったという。[2]「学童ら」が登校してこないのも、たとえば、一九〇二(明治三五)年の大凶作の際には、夏になってからも、毎日毎日赤羽根山から平野前原山にかけて濃霧に被われ二百十日になっても稲の出穂を見ず、二百二十日に至り点々と出穂を初め、二百三十日頃やっと出揃ったが開花せず、その後開花せるも結実しないで、遂に種もないような大凶作になった。秋になってから村民皆山野に出て蕨の根を掘り澱粉を取って食料にした。また楢の木の実も拾い集めて食った。

(菊池万重郎記録、遠野市立上郷小開校100周年・120周年記念誌『希望』)

という情況があったように、飢えをしのぐ家族総出の手伝いをして、それどころではないからである。米の収穫が見込めぬのならわずかでも現金収入を得ておきたい、人々は馬に炭俵を積んで町に向かって売りに出る。こんな非常事態にもかかわらず、例の藻をかけてやる配慮を失わない。「藻を装へる馬」のすがたには、農民の、馬に対するこまやかな心のありようがみえる。飢饉の風土をともに生きる、そのすがたが切々ととらえられていよう。

しかしこの凶作詩篇の始発は送別の詩であった。題材をメモした『文語詩篇ノート』の二九(昭和四)年の項には、

四月、ナガ眼空シク果ツベキ眼カ、高橋武治ニ送ル

とあるが、それを踏まえ、農学校時代の教え子が遠野へ教師として赴く、その激励を主題に下書稿一は起稿されていたのである。それが次のように、下書稿二の手入れから「なれ」を喪って激励は影をひそめ、下書稿三段階で詩の場が一変して、題名は失うもその本文が定稿に至る。

	稿一	稿二	稿三	定稿
過程				
題名	・	・→凶作地	二学期　凶作地→・	・
人物	なれ	なれ→・	わが	わが

そこには、三一(昭和六)年九月の遠野訪問が契機としてあった。そのとき案内役を務めてくれた高橋(沢里)武治に、「その后加減はいかゞですか。一二日天気が続いてよろこんでゐたら今日また曇りだして稲作は実に心配です」(九月九日付書簡386)と、詩人はいいやっており、また当時使用していた『兄妹像手帳』にも、

◎盆地をめぐる山くらく／わずかに削ぐ青ぞらや／稲は青穂をうちなめて／露もおとさぬあしたかぬ　（29・30ページ）

◎topaz のそらはうごかず／峡はいま秋風なくて／互の目なる小き苗代／ましろなる水を湛えて／をちこちに稲はうち伏し／その穂並あるひはしろき／またブリキのいろなせる…　（31・32ページ）

という凶作の光景を写したスケッチが記されるとともに、頁は前後するのだが、

西暦一千九百三十一年の秋のこのすさまじき風景を恐らく私は忘れることができないであろう　（7ページ）

ともあって、この年の凶荒に対して、敗北の宣言とみえようことばを書きつけている。この年、盛岡高等農林学校の恩師関豊太郎博士に学んだ、

廉価を以て農家に石灰肥料を供給し病土を改良して健康地となし耕地の拡張延ては農事の振興の一助とならん

（一七（大正六）年一一月一二日付『岩手日報』）

というかつての主張を、病躯のまだ癒えぬまま、まさに実行し実現しようと志して、東北砕石工場技師となり、岩手はもとより秋田・宮城まで奔走していたからである。なまなましいこの遠野体験は、凶作地帯という風土性をモチーフとした詩の場への転換に即時に向かっている。[3] いわば詩層の突端に、同時代の現実というものを据えてゆくのである。

4

異常気象の到来なども含めて、その風土をその時代の動きが重く圧している。それも、『文語詩稿』の性格のひとつとしてあるのではないだろうか。

農耕馬でなく放牧馬が現われる「悍馬」〔一〕に注目してみよう。そこには次のとおり、岩手山麓の種馬育成所で、牧人（まきびと）たちの呪文のごとき掛声とまるで蛞蝓（なめくじ）の角のように山上から麓へと次から次へと迫ってくる藍色の雲影に追い立てられて、いよいよ追運動に駆られるアラブ馬のさまがとらえている。

毛布の赤に頭（こうべ）を縛び、
陀羅尼をまがふことばもて、
罵りかはし牧人ら、
貴きアラヴの種馬の、
息あつくしていばゆるを、
まもりかこみてもろともに、
雪の火山の裾野原、
赭き柏を過ぎくれば、
山はいくたび雲溺の、
藍のなめくじ角のべて、
おとしけおとしいよいよに、
馬を血馬となしにけり。

アラブ種の原産地はアラビア半島とされ、

東洋種の代表であり、外貌の機微、能力の秀逸において世界で比肩するものがない。（略）容姿の美しさ、稟性の佳良、遺伝力の強さはこれに及ぶものがいない。したがって欧州の馬匹を貴化するのにことごとく本種が用いられた。

という[4]もので、日本でも、日清・日露の戦争体験を踏まえて策定された馬政計画による馬匹改良が同様であった。輸入したアラブ種による純血種の内国産アラブを、種馬牧場が生産し種馬育成所が調教、各地の種馬所に配布して、血液更新に供すというシステムが組まれている。[5]

この詩稿にその貴種アラブが現われるのは、三一年以降に展開したと推定される下書稿四からである。

それでも、三二（昭和七）年からの展開とみられる下書稿五の開始形までは、その詩想の重心は、題名にも示されているように、牧人たちの存在にまだかかっていたとみてよいだろう。けれども、その開始形に対し、詩人は別の鉛筆によって、たぶん三三（昭和八）年にかけて次のようなさらなる手を入れて、貴種アラブの存在のほうに重心を移してゆく。

過程	稿四	稿五	↓別の鉛筆手入れ
題名	牧人	牧人	［血→悍］馬図
本文	アラブの種馬	アラブの種馬	アラブの種馬
	・	・	馬を血馬となしにけり

「悍馬」と題を改め、本文に「馬を血馬となし」てゆくという追加をおこなうのである。そこには、アラブが舞台に登場してきた三一年の下書稿四以来、「牧人」の背後にあるものにまで、その視線を漸次おしすすめる詩想の深まりがあった、とみてはならないか。

そう推理するてがかりに、その三一年にはふたりの軍人が視察にやってくる、という『岩手日報』の新聞報道があったことを指摘しておきたい。四月一一日付では「軍馬補充部本部長梅崎延太郎少将」が、五月二二日付では「陸軍省軍務局馬政課長高波祐治大佐」が来盛して、ともに太田村（当時、現在の盛岡市の太田地区）にあったアラブ牧場を、また滝沢の種馬育成所（梅崎少将の場合はこのとき訪問したかは不明だが「従来滝沢の育成所等は数回視察して居りますが」との談話が載る）も訪れるのである。目的は、「陸軍ではアラブ種の馬を欲してゐる」とした『岩手日報』四月一一日付の見出しに明らかである。五月二二日付に載った高波大佐の談話にも、「何れにせよサラブレットにはあまり用がないアラブが最も僕らの興味を引く」とある。

このことが、詩想の深化に向かう契機を与えたのではないか。報道後の六月に、

種馬所と育成所とを訪ひ申候　（書簡358）

と、詩人もまた東北砕石工場技師として種馬育成所に向かっているのである。陸軍省は、その年の六月に「満蒙問題解決方策の大綱」をまとめ、七月には軍制改革案を提出。その先にあるのは、九月の満州事変から三二年三月の満州国建国宣言を経て三三年三月国際連盟脱退に至る、中国大陸侵略の途をひたあゆむ戦争突入への時代の動きである。アラブ馬の視察から、程なくまのあたりにしてゆく戦時への事態が、詩人の詩想に反映されていったのではなかろうか。

この詩稿がたどりついた定稿段階の「貴きアラブの種馬」を、作品論としては、たとえば、

核心は、この血馬に「宇宙意志」のエネルギーが降り注ぐ、その描写にあるだろう。（中略）牧夫が発する陀羅尼のような声に、宇宙の根源力がよび覚まされ、雲の影となって降り注ぐ、そしてそのエネルギーが、悍馬の持つ優れた特性を目覚めさせるのである。

とするような読みときも、もちろん成立しうるのであろう。[6]

けれども、その登場が、詩句の訂正や変更といった程度の推敲によってきたのでない点や、『文語詩稿』のなかで馬種名としてあえてこれだけが指名されている点からも、単なる追加の詩句だったと見過ごすべきでないだろう。

また、口語稿においても、サラブレッド・アングロアラブ・ハックニー・トロッターなどと、その馬種を見分けている詩人が、アラブ種の特質を知らなかったはずもない。その特質が活かされた結果として、

将校乗馬や騎兵用馬としてアラブ馬が多用されてきたことは、戦争の歴史が示すところである。[7]

という。歴史的にこの馬種は、戦闘を引き受けなければならない存在なのであって、精悍なる駿馬（しゅんめ）にいま与えられようとしているのが、まさに血にまみれねばならぬ、軍馬としての役割である。[8] 軍国化の象徴的存在として、この詩の場では意識化されている可能性も考えられるのである。

推理は、人々の生活に密接にかかわっているこの馬産の地が軍事政策のなかにからめとられてゆくそのゆくえを、種馬育成所の牧人たちの異様なありさま[9]に重ねて問おうとした詩想から、血馬と化してゆく貴種アラブの発見によって、迫りくる「戦争の時代」のゆくえを問う詩想へと深められているのではないか、というところまでたどりつくのである。

5

ここでは「馬」詩群をとおして、その風土性と時代性についてその一端を明らかにすることを試みながら、この馬産の地にいま重くのしかかっている、戦時に向かう同時代性を読みとろうとするところまでたどりついた。詩人の、

この「戦争」に対する関心は確かにあり、「馬」詩群から眼を転じると、たとえば、三三年八月前後に成った定稿「上流」五にみえる、次のような、大規模な手入れに、よく現われていると思える（傍線部が最終形、島田による）。

秋立つけふをくちなはの、沼面はるかに泳ぎ居て、
水ぎぼうしはむらさきの、花穂ひとしくつらねけり。

［蘆刈りびとはいまさらに、→いくさの噂しげければ、］
［赤くただれし眼あげて、→蘆刈りびともいまさらに、］
暗き岩頸風の雲、　　天のけはひをうかゞひぬ。

連日の農事の過労から眼を血走らせた農夫の像を、詩人は突然、戦時を案ずるふうに造形しかえるのである。七月には、満州事変以来の戦死者がすでに２５００名を超えたという状況である（陸軍省発表）[10]。詩人にも、実際、報道以外に、町や村の人々の間でかわされていた戦地の噂がさまざまなかたちでもたらされていた。八月には、満州に出征していた羅須地人協会時代の会員伊藤与蔵から病気の見舞いと近況報告を認めた手紙を受けとると、詩人はその返信で、

弟への度々のお手紙また日報等に於る通信記事、殊に東京発刊の諸雑誌が載せた第二師団幹部とか、従軍記者達とかの座談会記録に仍て読んで居りますが、実に病弱私のごときただ身顫ひ声を呑んで出征の各位に済まないと思ふばかりです。　　（書簡４８４ａ）

と記している[11]。

当時の検閲や報道統制のなかで得られる情報から、どこまで戦争の真実を洞察することができたか、といえば、疑問符もつけなければならないが、少なくともこの時期の詩人が、さまざまなメディアをとおし、戦争の現状について、あるいはこの「蘆刈りびと」のすがたにも重なり、そのゆくえを不安なまなざしをもって注視していたことを、うかがわせるものである[12]。

注１　定稿には、馬の姿は見えないが、伯楽（車中〔二〕百）や馬喰（社会主事佐伯正氏百・かれ草の雪とけたれば百）、あるいは放牧地（賦役百・塔中秘事百・雪げの水に涵されし百）や軍馬補充部（玉蜀黍を播き五）、また廐（こらはみな手を引き交へて五）など、かかわるところを場面にとらえているものがある。それも含めれば「馬」詩群は２０編近くに及ぶことになる。また未定稿にも「〔ま青きそらの風をふるはし〕」（うなじをあぐる二疋の馬）、「〔馬行き人行き自転車行きて〕」（馬が一疋東へ行く）、「〔あくたうかべる朝の水〕」（苗つけ馬）がみえる。

注２　旱害による凶作は、「旱倹」百・「旱害地帯」百・「遊園地工作」未・〔鉛のいろの冬海の〕未などがとらえている（未は未定稿）。

注３　島田「文語詩稿〔盆地に白く霧よどみ〕の生成」（『国語教育論叢』第１６号二〇〇七・三）を参照されたい。

草稿の段階に対して具体的な時期（年）を想定しているのには、詩稿用紙の使用開始時期が、『新校本宮澤賢治全集』第十六巻草稿通観篇の記述によれば、次のようにも推定されるからである。

・無罫用紙　二八、九（昭和三、四）年の「疾中」詩篇に使用。書簡には三〇（昭和五）年九月に用いられる。《文語詩稿》には三〇年前後からと推定。
・２６系用紙　２６行罫。書簡使用例がない。２２系用紙に先行して用いられている点から、三〇年からと推定。
・２２系用紙　２２行罫。日付が明確な書簡で三二年二月以降の使用例がある。三二年に入る前後から使用と推定。
・定　稿用紙　三三年六月にあつらえられたもの（宮沢清六「兄賢治の生涯」、『兄のトランク』所収、筑摩書房一九八七）。

なお、ヤマセの侵入を予告する雲や霧の出没に、詩人は相当敏感である。たとえば次の２編の詩稿（定稿本文も行形式で示した）、

柳沢野
①焼けのなだらを雲はせて、
海鼠のにほひいちじるき。

②うれひて蒼き柏ゆゑ、
馬は黒藻に飾らるゝ。
盛岡中学校
木柵に注ぐさ霧と
幹彫れる桐のいくもと
白堊城秋のガラスは
ひらごとにうつろなりけり
一鐘のラッパが鳴りて
急ぎ行く港先生
気乗りせぬフットボールを
村久のさびしく立てる
（未定稿）

における、「柳沢野」の「海鼠のにほひいちじるき」雲、「盛岡中学校」の「木柵に注ぐさ霧」とは、ヤマセの雲であり霧であると読みうる余地をもっている。やはり「藻に飾ら」れた馬をつつみこんでいる「海鼠のにほひ」というのも、三陸沖から冷たい風が運んできたかすかな潮の匂いではなかったろうか。「さ霧」もまたさわやかな朝霧にはみえにくい。「うれひ」あるいは「うつろ」というその詩の場を支配している調子が、けっしてかろやかなものでないからだ。前者は、『歌稿〔B〕』で「明治四十四年一月より」と示された歌群のなかの一首をもとに文語詩化され、その過程で現われてきたもの。後者は、『文語詩篇ノート』に記入されている一三（大正二）年九月の「桐下ニテ霧ノ朝／村井、高橋、佐光、」という素材メモを踏まえたもの。いずれも、中学五年の宮沢賢治がまのあたりにした凶作という事態をその背景にしている可能性も考えられる。とすれば、雲も霧も、やはりあのときのものであり、それを詩層に埋めて詩の場は構築されている。

注4　武市銀治郎『富国強馬』（講談社選書メチエ一九九九）。

注5　詳しくは、島田「貴きアラヴの種馬／文語詩稿五十篇「悍馬」試注」（『国語教育論叢』第14号二〇〇五・三）、「貴きアラヴの種馬を追う／文語詩稿「悍馬」〔一〕の詩層」（『賢治研究』96号、二〇〇六・二）を参照されたい。

注6　長沼士朗「宮沢賢治の宗教的世界観〜その「宇宙意志」をめぐって〜」（『風船』第10号二〇〇七・五）。

注7　注4に同じ。

注8　「血馬」については、『漢書』にみえるとした「汗血馬」（伝説の駿馬）のこと（原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍一九九九）とする理解が一般的であったが、宮沢賢治学会福山セミナー二〇〇九における発表者の事前勉強会で、磯貝英夫氏から、この造語が「血税」（『言海』によれば、命ヲ税トスル意、徴兵ノ異称）からきていることも考えられるのではないか、との助言をいただいた。

注9　詩稿用紙上に起稿した最初である下書稿一（〇稿）、三〇年）の本文は無題で、

ひかりまばゆき雲のふさ、
わづかにゆるゝ栗のうれ、
赤き毛布にぬか結び
陀羅尼をまがふことばして
雪あえかなるこのみちを
牧人たちのい行くなれ
松のみどりはあせたれど
針つややかに波立たす
（最終形）

というもの。「牧人ら」は「赤き毛布にぬか結び陀羅尼をまがふことばして」とすでにその妖しさがとらえられているが、輝く天上とうらさびしい地上との間にあって、焦点は妖しい牧人にあって馬は姿を現わしていない。用紙が26系で〔冬のスケッチ〕を素材としたものが多く、これもその散佚稿の可能性がある。とすれば、一二、三（大正一一、一二）年の農学校教師時代の体験のうえに成り立っていったことになる。

注10　『近代日本総合年表第四版』（岩波書店二〇〇一）による。

注11　この書簡に、「戦争支持思想」を読むものもあるが（鈴木敏子など）、栗原敦「手紙の読み方 - 伊藤与蔵あて宮沢賢治書簡について -」（『實

踐國文学』第53号一九九八・三）が、当時の検閲の状況や、報道事実を伝聞のことに踏みとどまっている点、戦地から見舞い状をくれた伊藤に対してとるべき態度などを指摘し、反論している。

注12 「馬」詩群の関連作品に、開所祭に向けた農婦たちの手踊りの稽古を所長に見とがめられそうになって技手が慌てて中止させるという、軍馬補充部六原支部を舞台とした〔玉蜀黍を播きやめ環にならべ〕五がある。三二年以降の再編段階に口語稿をもとに《文語詩稿》化され、鉛筆の〈写稿〉に撰ばれ定稿化されたが、六原支部は二五（大正一四）年に廃止されている。同時代性の観点からすれば、ずれていることになるが、このずれにも意味を見いだすことができる。六原支部跡地は民間払い下げの嘆願や飛行場誘致など紆余曲折を経て、満州国が建国された三二年九月に石黒英彦知事の肝いりで六原青年道場が設立されることになり、「風教の作興並に産業の開発に尽くし進んで新領土及び海外に発展し、以て本県の振興と皇国の隆興とに貢献する地方中堅人物を養成する」（傍線は島田。『岩手県大鑑紀元二千六百年記念』新岩手日報社一九四〇）という施設として再生する。その訓練部から早速一〇月には満蒙武装移民団が巣立った。かつての軍馬補充部が軍国主義の一翼を担う人材育成の場に転じる年から、この詩稿は《文語詩稿》化されたのである。軍馬補充部六原支部の記憶を再現するこの詩の場には、その上層に、農兵養成の六原道場という、現在進行形の場が積みあげられるはずだ。それを、あえて下層部分の再現に踏みとどまっている。目をそむけているのではなく、生活の身近にいままさに動いている戦争という時代の現場について、その裏づけをしているのではなかろうか。たとえば、

③さあれひんがし一つらの、
　うこんざくらをせなにして、
　所長中佐は胸高く、
④「いそぎひれふせ、ひざまづけ。
　みじろがざれ。」と技手云へば、
　種子やまくらんいこふらん、
　ひとらかすみにうごくともなし。

という場面には、軍国主義がすでに着々と人々の間に浸透して、それは精神を教化し、肉体化さえされているありさまを読みとることもできそうである。そのような基盤のうえについに現われてきたものを、詩人はこの詩の場の虚空に凝視していると考えてはならないだろうか。

（島根県立松江工業高等学校定時制課程教諭）